

鳴海 邦匡 著

『近世日本の地図と測量一村と「廻り検地」一』

九州大学出版会 2007年2月

B5版 193頁 4,800円

本書は著者が平成17年3月に九州大学大学院比較社会文化研究科に提出した課程博士の学位請求論文「近世日本における地図測量技術とその伝播」を基にして、若干の加筆修正を行い書名を本書のごとく改めて刊行したものである。近世日本の地図と測量に関する体系だった研究書はこれまでにほとんど見出すことができない。日本の近世には各地域で膨大な量の地図が作成されていて、その多くが現存している。それら近世絵図についての個別的な紹介や作成を担った人物の業績を紹介した報告は少なくないものの、その技術的な作成過程までも追跡した研究は少ないのである。地図作成に際して行われた作業の根本データである測量帳を残す例がきわめて稀であるという資料上の制約から、地図作成の技術的な事柄に関する研究の困難さが原因している。

著者は現在の大阪府と兵庫県にまたがる北攝地域において17世紀から19世紀にかけて山論訴訟に関係して作成された各種絵図とその作成にかかわる測量帳、文書、日記などを綿密に調査・分析して、「廻り検地」による測量の軌跡を具体的に復元し、わが国の地図作成にかかわる測量技術の進展と普及の実状を究明している。測量術のうち盤針術による「廻り検地」がとりわけ境界論争など精度の高い地図作成に必要な測量技術として近世村落社会に広く伝播していたことを明らかにしている。本書は従来手つかずであった分野に踏み込んでいて、今後の近世地図史研究の新たな進展に寄与するものであろう。

本書の内容構成は、細目を省き章立てに限って示せば以下の通りである。

序章 近世日本の地図と測量をめぐる研究の課題

第1章 農村社会における地図と「廻り検地」
— 地方書と和算書の検討から —

第2章 山論絵図の成立と展開

第3章 山論絵図と「廻り検地」

第4章 村における「廻り検地」の実践

第5章 幕府権力による村の「廻り検地」

第6章 コンパスからみる近世日本の地図史

終章 まとめと課題

序章において、著者は本書の課題が近世日本の在地社会での地図測量技術の受容と普及過程をみて、近世日本における地図近代化のプロセスを明らかにしたいとの意向を明確に示している。具体的には在地社会において正確な地図がいつからどのような技術で作られるようになったかを明らかにすることであって、その研究のキーワードとして村・地図・測量の3つにしばることを表明して、近世の地図史、とりわけ村絵図についての先行研究を展望している。

著者の研究課題の設定は明確であるが、村絵図に関する先行研究の評価についてはやや近視眼的な感じがしないでもない。もう少し幅広く村絵図研究の成果を評価して、自らに残された課題を訴えるべきではなかったろうか。確かに著者の指摘するとおり、これまでの村絵図については体系的な研究は少なく、景観復元的研究や作成に携わった人物の個人的業績の究明にかたよる傾向があったとの指摘は的を得ている。とはいえいまま少し視野を広げて村絵図の先行研究を展望してもらいたかった。例えば木村東一郎の『江戸時代の地図に関する研究』（古今書院、1967）では村絵図の分類ばかりでなく、鳴海氏が課題とする測量・絵図師・境界・作図者など在地社会における絵図作成の様々な事例の概要が紹介されている。そして村絵図の精度は千差万別であるものの裁許図として作られた場合などは専門職である絵図師によって概して精巧な図が作製されていることなども指摘している。木村氏の仕事を「村絵図を非科学的な地図と評価する立場」として切り捨てるにはいささか抵抗がある。

拙著の『近世絵図と測量術』（古今書院、1992）は教本類に依拠しながらも地図作りと測量との関係を素描している。そして藩行政に必要な村絵図が各領内で組織的に作製されていた例として名古屋・鳥取・萩・佐賀藩などの場合を取り上げて、村絵図の整備を制度史的な視点でとらえたものであった。また木全敬蔵氏による伊予の目黒山境界争論についての報告（木全敬蔵「愛媛県松野町に伝わる17世紀作成の地形模型について」地図31-1, 1993）は「廻り検地」の実施を測量データを

含めて具体的に紹介した唯一の先駆的な研究例であれば、序章において後述するといつて後回しにするのでなく、当然先行研究の成果として当初に言及すべきではなかっただろうか。

本論に入る前に著者はまず本書の中心課題である「廻り検地」について、近世の地方書ないしは和算書、測量術書にどのような解説がなされているかを網羅的に調べあげている。その上で盤針術の一種であるこの測量法が日本の近世在地社会において村方役人の地方支配の根幹にかかわる土地丈量の基本的技術であったと位置づけている（第1章）。この前段的な解説が本書の研究意義を大きく高める効果をあげているものと評価したい。

近世の村落で測量をとまなう精度の高い地図は境界争論に際して作成されるという仮設をもって著者の研究はスタートしている。地形の複雑な山地での論争においては訴訟での証拠の資料として立会絵図や地図模型などを作成する必要から測量を伴う場合が多いと著者は考えた。とりわけ山論は測量とのかかわりが深いとの判断から、著者は山論絵図成立の時代とその全国的な動向を踏まえたうえで、畿内における論所の公事訴訟のシステムの変遷を概観し、北摂地域で作製された山論絵図の現存状況を調べあげて57点の所在を明らかにしている（第2章）。そのうち山論絵図の作成にかかわった測量帳3点の現存を確認できたという。

論地や村の境界の地図が作成される契機となった山論は17世紀後半以降に数多く発生している。土地の利用や開発が近世中期以降から進展した状況を語るもので、早急に地図を作るシステムや手法など新たな技術の展開が必要となった。そのような点で簡便な地図作成の方法として「廻り検地」の有用性が在地社会に波及したというのが著者の見方である（第3章）。一般には絵図作成のために行われた測量のデータである測量帳（野帳）を残すのはきわめて稀な状況のなかで、本書で取り上げている摂津国豊島郡の山論絵図については幸運にも測量帳が残されていたことにより、その根本資料を用いて「廻り検地」の軌跡を復元できたのである。

延享3年（1746）に摂津国豊島郡の牧之庄6か村（平尾・西小路・牧・桜・半町・瀬川村）と新稲村との間で法恩寺松尾山の採草地入会権や林地

の帰属をめぐる争論が生じ、大坂町奉行所への出訴によって山論訴訟となった。奉行所の裁許を仰ぐのに双方による論所の立会絵図の作成が求められたことにより、「廻り検地」によって現地の測量が行なわれた。そのときの測量データを記録した2冊の「山絵図分間合帳」が現存していることから、その根本資料を用いて立会絵図作成のために実施された「廻り分間」による測量の綿密な復元を試みている。その測量では12支の1支（30度）を10等分した3度単位目盛の「小丸」と呼ばれる磁石盤で方位角を測り、その測量データに基づいて縮尺「五里壱間」、つまり1,200分の1の立会絵図が作成されたことを実証している。そして復元作業で得られた測量区域の形状を立会絵図および裁許絵図と比較して、その形がほぼ整合することを確認している（第3章）。

山間の谷間などでは地形の勾配をも目測にて「少シ上り」、「下り」「上り」、「大下り」の4段階の傾斜を考慮しておよその水平距離を割り出していた。総延長およそ3キロメートルにおよぶ論争地を1週間程度で測量し終え、その1か月半後には立会絵図を仕上げ、それを大坂町奉行所へ提出している。このように測量作業が迅速に進んだのは「小丸」と称する軽敏な磁石盤を用いたためであると著者は考えている。そしてこの一連の山論訴訟の関連資料と測量ルートの復元をもって、著者は18世紀中には畿内近国の在地社会においては「廻り検地」の測量技術がすでに一定のレベルに達して普及していたものとみなしている。

法恩寺松尾山の山論では資料の制約から測量の技術的な復元に限定されて作業の当事者が誰であったか、測量から作図にいたる作業過程、訴訟の経過などを具体的に示すことができなかった。そのため次にはそれを補うために摂津国豊島郡のうち才田・尊鉢村と畑村との間で前山と後山をめぐる山論の場合を検討している。この山論は天明3年（1783）に才田・尊鉢村による大坂町奉行所への提訴によって訴訟となり、立会絵図の提出、尋問、現地調査などを経たものの、提訴から9年目の寛政4年（1792）に内済にて決着している。この山論に係っては測量帳ばかりでなく争論の経緯を語る日記までが残されていることから、それらの資料を分析して測量の復元に加えて提訴・絵師の雇用・現地の立会調査・測量作業などの争

論の経緯を具体的に明らかにしている（第4章）。

前後9年におよぶこの山論訴訟の過程では山論の起る以前に作成されていた絵図が証拠資料として引き合いに出されていた。そのうち山論の起る20年ばかり前の明和年間に作成されていた豊島郡5か村5点の「御小物成場絵図」（表5-1）に注目し、これらの絵図を今回の山論にあたって作成された立会絵図とその精度を比較している。この「御小物成場絵図」は豊島郡のうち京都代官所の支配下にあった小物成地を対象にして村々に统一的に作成された分間地図であるという。

これら「御小物成場絵図」にはいずれもそれぞれ村の庄屋・年寄・百姓惣代の連名で代官小堀数馬へ差出の裏書があることから、従来これらの絵図は村方で作成して代官所に提出されたものと考えられていたという。ところが著者は絵図の凡例文面をもって従来の見方をくつがえして、これらの絵図を作成したのは村方ではなく代官所であって、関係の村々へはその控図が手渡されたものと解釈している。

そしてこれら「御小物成場絵図」は形状がかなり正確に描かれていて出来ばえが、およそ20年後に村方が作成した立会絵図と遜色のないことから、立会絵図とほぼ同等の測量技術をもって作られていたものと判断し、代官所側の測量技術の高さを評価している。このことをもって18世紀に畿内において「廻り検地」による測量技術が支配者（幕府）側と村方（村落）にてほぼ同等なレベルであったとの見解を示している。そして小丸を用いて「廻り検地を行うという行為が、18世紀なかごろの段階において、在地のみならず、いまだ幕府側にとっても土地を測る一つの技術として信頼される段階にあった」と結論づけている（第5章）。

ただ筆者はこの著者の結論というよりも、このような見解がみちびかれた過程に若干の気掛かりを感じている。つまり証拠とした「御小物成場絵図」がはたして著者が考えるように本当に代官所側で作成されたのであろうか。当時の地方支配の通例からして代官所が地図を作成して村方に手渡すというやり方にはいささか不自然さを感じるのである。この点については再検討の余地を残しているのではないだろうか。

「廻り検地」の測量方法は方位角と距離を順次に測り進む作業であって、この基本的な作業内容は時代を経ても変化がなく、測量精度を高めるのは使用される方位磁石盤の改良、向上をみるだけである。そのために著者は最後の章で近世における方位磁石盤（コンパス）の目盛り精度の変遷に目を向けて、教本や実測例にて知り得る範囲での磁石盤の一覧を試みている（表6-1）。これまでに本書で取り上げた「廻り検地」の実例とこの磁石盤の一覧を参考にして、著者は18世紀の段階で「廻り検地」を用いる地図測量の技術は日本の在地社会に広く伝播、受容されており、測量の基本的用具としては3度単位の日盛りをもつ「小丸」の実用性が高く、それを用いての測量が主流であったと結論づけている（第6章）。

その後19世紀に入って村絵図に1度単位日盛りのコンパスを用いた村絵図の登場を認め、伊能忠敬の測量にいたり、製図に三角測量を用いる段階で「廻り検地」が地図作成技術としてひとつの到達点を迎えたと評価している。境界の測定に磁石の日盛りの1支（=30度）の10等分（=3度）をさらに10等分した18分単位日盛りのコンパスが使用された例として、上記の一覧表では17世紀中ごろ宝暦期の筑前・筑後国境争論、17世紀末の寛政期に筑前秋月領と筑後久留米領の境界争論、さらに一覧表にはないが天保2年（1831）の筑前怡土郡の福岡藩領と幕府領境杭設置の例（川村博忠「筑前怡土郡における幕府領と福岡藩領の境界列石」、桑原公德編『歴史地理学と地籍図』、ナカニシヤ出版、1997）などもあって、西日本の在地社会でそのような高精度のコンパスが利用されていたことも注目されよう。

ところで本書を総括すると、著者は「廻り検地」を手早く地図を作る技術として、17世紀中ごろにはじまり18世紀には在地社会に広く普及したと結論づけている。確かに「廻り検地」が一定の区域の外周をある程度の精度をもって容易に描き出す技術であることは疑いない。しかし、「手早く地図をつくる技術」として一般化したというとらえ方はやや短絡的ではとの印象をぬぐいきれない。

著者も冒頭の地方書の解説で言及しているように「廻り検地」は本来検地の技術であった。「廻り検地」はあくまで検地の技術として在地社会に

定着していたことは著者も認識しているようであるが、これが手早く地図を作る技術であったと飛躍して考えることには躊躇せざるを得ない。『徳川幕府県治要略』で「廻り検地は全部の形状を知るに要するものなれば、縄だるみ端尺切捨等の取捨を用ひず」とあるように、廻り検地はあくまで検地の際に全体の周囲のあらましを測定する作業であって、土地丈量の測量技術として地方に継承されたものであった。

近世の絵図作成のための測量方法は一つではなかった。絵図を作るには描こうとする範囲の広狭、つまり田畑絵図や村絵図程度のものから国絵図などのような広い範囲のものかによって作成方法は違っていた。狭い範囲であっても城下絵図な

どのように街路や家並が詳細に図示される市街図では図示内容の詳しさの程度が違って作成方法は異なっていた。方位と距離を順次に計って進むこの技術は一区域ないしは一村の形状（輪郭）を概略描きだすとはいえ、測量の始点から終点まで一巡して合致するような結果は期待できないであろう。「廻り検地」は確かに地図作成の一つの有効な技術ではあっても必要に応じた選択的な技術であったと考えるのが妥当ではなかろうか。北摂地域の山論絵図のみばかりでなく、近世の村絵図作成の技術面に関する事例をさらに広く検討して、地図作成と測量のかかわりの研究に一層の厚みを加えてもらいたい。

(川村博忠)